

「参照点構造」再考

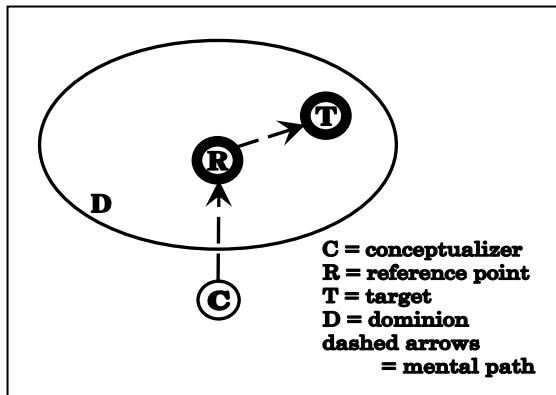
高木 勇†
(京都大学大学院)

1. はじめに

本稿では、さまざまな言語現象の説明の道具立てとして用いられている「参照点構造」について考察する。言語学の分野では、この概念が流布するようになって久しいが、このモデルに関する批判的な議論はあまり見受けられない。そのような中、本稿では、この参照点モデルに対して、以下のような疑問を投げかける。

- (1) 「参照点モデル」は「話し手」のモデルなのか、
あるいは、「聞き手」のそれなのか。¹⁾

もちろん、言語活動の際、話し手・聞き手ともに参照点能力を用いているのは確かであろうし、Langackerも、図1において、“conceptualizer”というタームで、話し手と聞き手の両方を意図しているようである。しかしながら、この図1は、果たして話し手・聞き手双方の認知プロセスを、適切に表すことができているのだろうか。



【図1】「参照点構造」(Langacker, 1999, p. 174)

2. 「モデル」の用法/性質

山梨(1988)では、以下のような「モデル」一般の用法が挙げられている。

- (2) a. 目標となる対象をつくりあげるモデル
b. 目標となる対象の基本的な構造やしくみを表現するモデル

- c. 目標となる対象を理解していくためのたとえとしてのモデル

(山梨, 1988, p.133)

この分類で考えると、図1のモデルは、(2b)あるいは(2c)ということになる。確かに、一見すると、このモデルは参照点能力の「構造やしくみを表現」しており、その能力に関する「理解の一助」になっているように思える。しかし、「原理を探求するためのモデルとしては、かえって単純なものの方がよい」(甘利, 1989, p.7)とは言え、図1のモデルでは、(1)のような疑問が残る、「対象の理解を保証する」(山梨, 1988, p.144)域に達しているとは言えない。

3. 考察

疑問(1)において、「話し手」か「聞き手」かという単純な二択を示したが、これはより厳密には(3)のような三択になる。

- (3) a. 聞き手による言語理解のモデル
b. 話し手による事態認識のモデル
c. 話し手による言語生成のモデル

(3b)は、平たく言えば「伝達内容の決定」であり、いわゆる「深層生成」に当たる。また、(3c)は「言語表現の選択」の段階で、これは「表層生成」に相当するものである (cf. 乾(1999, pp.119-120))。

以下、漱石を読んだという例を用いて、図1のモデルを(3)の観点から考察していく。

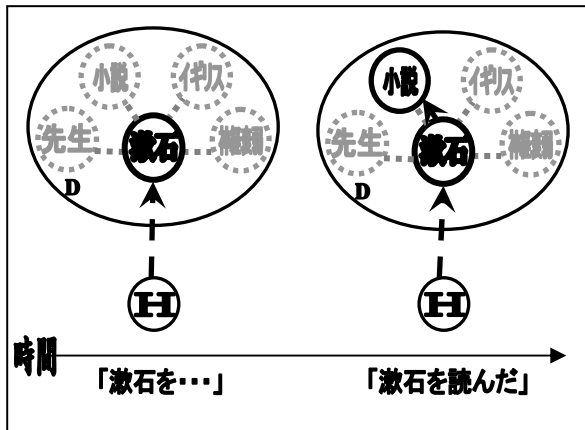
3.1. 聞き手の言語理解モデルとして

まず、「聞き手の言語理解のモデル」としてであるが、これについては、(2b)あるいは(2c)を満たしていると思われる。つまり、話し手の発話内に表われる参照点となる語句を聞いた時点で、聞き手の頭の中には複数のターゲット候補が起動され、その後、文脈等から話し手が意図するターゲットに到達することになる。例えば、漱石を読んだという表現を聞き手は次頁の図2のように処理していると思われる。²⁾

²⁾ 図2は、言語処理の「並列性」・「同時性」と矛盾する印象を与えるが、ここでは、「出力をもう一度入力にフィードバックさせる」タイプの、いわゆる「相互結合型」(例えば、甘利, 1989, p.28)の処理回路網を前提としている。つまり、漱石という入力①から出力された先生や小説などのターゲットの候補を、読んだという入力②と共に、再度入力し、最終的な出力をする、ということである(厳密な意味での「同時性」は仮定していない)。

† rebornn2005@yahoo.co.jp

¹⁾ 本稿では、「話し手」という語で「話し手」と「書き手」、
「聞き手」という語で「聞き手」と「読み手」を総称する。



【図2】聞き手による 漱石を読んだ の処理

3.2. 話し手の事態認識/深層生成モデルとして

話し手による事態認識/深層生成は、発話(表層生成)に先行するものであるが、図1はこの段階のモデルとしては矛盾する。つまり、話し手が「ある参照点を選択する」というのは「ある言語表現を選択する」ことであり、これは明らかに表層生成の段階である。「どのような言語表現で」という要素は、深層生成(伝達内容決定)の段階には当然含まれない。

例えば『『こころ』を読んだ』という事態において、伝達情報として、「夏目漱石の小説を読んだ」を選択することは、この段階の作業と成り得るが、「読んだもの」をどう表現するか(「夏目漱石の『こころ』」、「漱石の小説」、「漱石」等)は深層生成のこの段階には含まれない。従って、表層表現としての参照点を含む図1はこの段階のモデルには成り得ない。

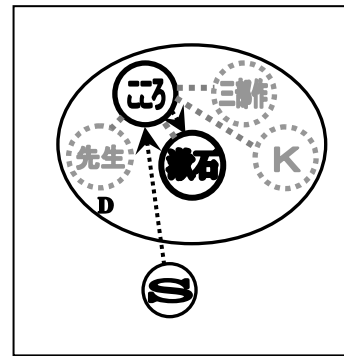
3.3. 話し手の言語/表層生成モデルとして

最後に話し手の表層生成のモデルとしての考察であるが、これも深層生成と同様に矛盾する。

そもそも表層生成とは「言語表現の選択」(辻井, 1988, p.201)(狭くは「語選択」(乾, 1999, p.120)等)を行う段階であり、この時の話し手の関心は表層表現(何を参照点として選択するか)である。話し手は、聞き手による対象特定の助けとなるような参照点にあえて言及するのであり、話し手は、参照点への心的接触の前に、当然、ターゲットへの心的接触を果たしている必要がある。ごく簡潔に言えば、聞き手の言語理解の真逆のプロセス³⁾ということになり、図3のような構図が得られる。

話し手と聞き手の認知プロセスは、それぞれ「記号化」とその「復号」(Herskovits, 1991/1986, p.127)であるから、図2と図3においてそれぞれの

³⁾ もちろん、厳密には「生成は単なる「理解の逆の操作」ではない」(乾, 1999, p.118)。



【図3】話し手による表層生成

プロセスの流れが逆になる(ターゲットと参照点の関係が入れ替わる)のはある意味当然のことである。

しかし、図3内の矢印を、図2内の矢印と同種の心的接触を表すものとして扱えるかどうかは疑問である(その意味で矢印を異なる模様で表した)。

また、もう1つ重要な点として、話し手による表層生成時にキャンセルされる参照点としての候補(先生, 三郎作, K)は、聞き手が参照点の漱石を聞いた際に起動するターゲットの候補(先生, イギリス, 神経衰弱)とは完全に一致しないことが挙げられるが、これは起動される支配領域に違いがあるということである。この点においても、話し手と聞き手のモデルは区別することが望ましいと言えるのではなかろうか。

4. まとめ

本稿では、参照点構造の従来の図式は、話し手の認知プロセスを適切に捉えていないことを示した。それぞれの認知プロセス(図中の矢印)の性質の違い等、pendingのままの問題もあるが、少なくとも、話し手・聞き手のモデルを区別することには意味があるだろう。

参考・引用文献

- 天野 真家・石崎 俊・成田 真澄・福本 淳一 (2007). 『自然言語理解』. 東京: オーム社.
- 甘利 俊一 (1989). 『神経回路網モデルとコネクショニズム』. 東京: 東京大学出版会.
- Herskovits, Annette. (1986). *Language and Spatial Cognition: An Interdisciplinary Study of the Prepositions in English*. Cambridge/ New York: Cambridge UP. (堂下 修司・西田 豊明・山田 篤 訳 (1991). 『空間認知と言語理解』. 東京: オーム社.)
- 乾 健太郎 (1999). 「文章生成」, 田中 穂積(監修) 『自然言語理解: 基礎と応用』, (pp. 116-158). 東京: 電子情報通信学会.
- Langacker, Ronald. W. (1999). *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 高木 朗・伊東 幸宏 (1987). 『自然言語の処理』. 東京: 丸善.
- 辻井 潤一 (1988). 「今後の展望」, 田中 穂積・辻井 潤一(編) 『自然言語理解』, (pp. 191-214). 東京: オーム社.
- 山梨 正明 (1988). 『比喩と理解』. 東京: 東京大学出版会.